

レッチワース

時の流れを刻む「田園都市」

溝口伸一

MIZOKUCHI Shinichi
日本工営株式会社 / コンサルタント国内事業本部 / 事業企画室



都市計画家が最も訪れたい世界初の田園都市

ロンドンの劣悪な環境下に置かれた労働者階級へのアメニティ豊かな住宅環境の提供を目指し、E.ハワードが「明日の田園都市」を提唱(1889年)し、10年余を経過した1903年、その理想を実現する地に選ばれたのがロンドンの中心地から約35マイル北、ハートフォート州に位置するレッチワースであった(右図)。

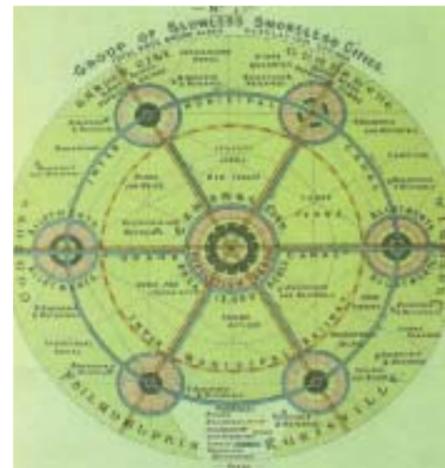


図 - ハワードの田園都市構想図

ハワード、アンウィン、パーカーの思い・・・

田園都市の理想を現実のものにしたのがパーカーとアンウィンという二人の建築家である。彼らは中世のイギリスの田園集落の持つコミュニティ、絵画性を育む集落のデザインに思いを馳せ、ハワードの田園都市の理想であった田園と都市の見事な「結婚」の意識に成功した。

レッチワースには、建設当時の建物(写真1)から建設されたばかりのタウンセンター(写真2)まで、途切れることのない100年の時の流れが刻む歴史と、懐かしさを醸すピクチャレスク(絵画的)な街並みがあった。

中世田園集落からのデザイン技法

アンウィンとパーカーが描いたレッチワースの街並みづくりの思いは、100年もの間、人々の営みの中でいかにして綿々と引き継がれてきたのであろうか。そこには、イギリスの中世田園集落から持ち込まれたデザイン技



写真1 - パーカーとアンウィンが設計事務所として使用した建物「最初の田園都市記念館」



写真2 - タウンセンターのレイズアベニュー地区



写真3 - カージーの集落



写真4 - 建築線と道路線を分離し前庭が導入された

法 - 計算された『仕掛け』があった。

土地の規範を読む

従来の農地を守ることで確保された市街地を取り巻くグリーンベルト、樹林地であるノートンコモン緑やピクスブルックの自然の川の流れを使った公園など、土地の記憶が生かされている。

昨今、住宅地開発においても、あるいは首都機能移転の検討においても、地形に配慮したクラスター型開発が志向されており、その設計思想をふんだんに盛り込まれたレッチワースには学ぶべきものが多く見受けられる。

『不規則さ』によるピクチャレスク性の創出

アンウィンが好んだといわれるイングランド東部のカージー村。そこにはどこか懐かしい落ちついた街並みを見ることができる(写真3)。アンウィンは、そこに『意図的に曲がる道』や『建築線と道路線の分離と前庭の導入』などのデザイン技法を読み取り、田園都市の計画に数多く導入することで、ピクチャレスクな街並み演出に成功した(写真4)。

社会的小集団に注目したコミュニティの形成

アンウィン等は、地域コミュニティ形成の仕掛けとして、街区設計の中に行き止まりの小径の『クルドサク(写真5)』や市民の共有緑地である『ビレッジグリーン(写真6)』等の工夫を導入しており、それらが今に続く人々の交流を

育んできている。

日本で都市を、街をデザインすること...

世界大戦や高度経済成長を経る中で、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返した日本の都市デザインには、時の断絶が感じられる。しかし、経済の安定・低成長化の中でストックの時代へと移行してきており、都市にも歴史が積み上げられてくる時を迎えたように思う。

レッチワースやカージーに降り立った時に感じた『懐かしさ』は、日本人の心の中にある古き良き農村、ふるさとの風景に起因する原風景として感じたためではないだろうか。

今後のまちづくりにあっては、ふるさとの風景に置き忘れてきた日本の農村集落のデザイン技法を今一度紐解き、コミュニティの再生に立脚したデザインを志向してみてもどうだろうか。

(写真: 1、川瀬喜雄 4、5、初芝成應 6、小松 豊 他、筆者)

参考資料
1) 東秀紀ほか、「明日の田園都市」への誘い - ハワードの構想に発したその歴史と未来、彰国社、2001年
2) 西山康雄、アンウィンの住宅地計画を読む - 成熟社会の住環境を求めて、彰国社、1992年
3) 田園都市 100年の歴史、景観デザイン研究会、2000年8月
4) 造景(No.16、98-8、139ページ - 167ページ)最初の田園都市レッチワース



写真5 - クルドサク



写真6 - ビレッジグリーン